

参謀本部第8課 対ソ謀略宣伝極秘資料—史資料解読連続講座（2）

山本武利（NPO法人インテリジェンス研究所理事長）

2013年7月13日

1、参謀本部第8課「対ソ宣伝資料」の分析

- 第8課が解体される1943年10月15日までの時期での緊急提案。43年春から夏にかけて精力的に具体案を作成。起案者として明記した勝野自身が作成した1941年4月10日「ソ」宣伝研究機関の機構」案（39）が含まれている。ここでは部員は16名、嘱託9名と多人数で、機構は大きい。第1年度予算は5万4千円。研究調査企画部、資料作成部、音響部は200円の月給である（佐官級）。そこでは「本機構ハ参謀本部第2部ニ隷属」すると謳い、正規の組織に属する機関としての自負を表明している。しかし英米との開戦になり、対ソ静謐保持のため、構想を2年間休眠としていたが、ガダルカナル撤退など太平洋戦線での日本不利な戦局挽回のためのあがきとしてソ連との開戦案が急浮上したとも推測されよう。満州国境からの精鋭部隊の南方戦線への抽出も、八路軍的な陽動的ゲリラ戦の必要性を認識させるようになった。日本軍の遊撃戦化の戦略が対ソ戦線でも展開せざるを得なくなっていた。したがってビラや放送は前線のソ連兵に対象が限定されるようになった。再提案と具体化を求める声が課内において43年初頭の時点に高まった。
- 勝野らは慌てて機構の具体化を図るとともに**ビラや放送**の文案の作成に入った。彼らはリシュコフの知恵と情報を借りた。次の月日付けで文書が作成されている。
 - 3月 6日、20日
 - 4月 10日、17日、19日、23日、26日、29日
 - 5月 1日、5日、7日、14日、15日、18日、19日、21日、28日
 - 6月 12日、18日、25日、26日、30日
 - 7月 1日、2日、6日、7日、9日、20日、22日、23日、30日
- ビラは43年3月20日付けの34が最初で、6月26日付けの12が最後である。放送文案は7月22日付けの吉村執筆文（3）ものが最初で、7月30日付けの（2-1）が最後である。

4月から7月にかけて週2、3回の高い頻度で会議がもたれ、これらの文書が検討された。その討論のメモは欄外に筆記されていることが多い。
- 機構はかなりの規模である。もっとも整理されているのは、10の組織図（資料1）。これは39の手書きのものよりもまとまって来ている。39にあった企画課、調査課、技術課、連絡課、要員局などの宣伝本部の構成が、10では第1部長、第2部に大別されている。
- 資料の冒頭や内部の資料の数か所に鉛筆書きで「中田」と記載されている。中田は中田光男であろう。本資料ファイルは第8課第11班に所属したソ連担当の文官であった中

田所持とみてさしつかえない（中野149）。彼はロシア語ができて、ルシュコフの世話をしていた（池田32）。中田が最初から最後まで事務方として仕事を支えて、会議で出された資料をファイルに綴じていたことはたしかである。そして敗戦時に処分しないで、秘かに持ちだして保管していたと推測される。

- 活動の指導系統は明記されていないが、勝野金政、馬場秀夫（9）、吉村柳里（9）（3）や中田の名前が登場していることから、設立時の1937年11月から嘱託として参謀本部に関与していた勝野のグループが8課の将校の認可を得て、グループの拠点である九段事務所で作成したもの。文案では「九、事、所」と九段事務所を示している（35、36、26－資料2）。
- 岡田桑三が43年8月に東方社を辞任した頃と本資料の最後の時期がほぼ一致するのは、多川証言を裏付けることかもしれない。あるいは43年10月での第8課の消滅に関連しているのかもしれない。
- ロシア語の手書き文が1つある（11）。署名はルシュコフか？
- ビラの大きさはハガキ2枚大で、その対象は「前線兵士」（29－資料2）
- ビラの対象は前線兵士で、その内容は投降勧誘。放送の対象は後方の一般国民よりも前線兵士向けである（戦場放送）。7では対象に「赤軍将兵並びに銃後一般国民」とあったものが、「並びに」以下が削除されている。
- 前線でのプロパガンダに焦点があてられ、空中からの散布は検討されていない。この時点では関東軍の対ソ戦闘が構想されたとしてもゲリラ戦しか現実的対応として想定できなくなっていた。
- 謀略蒐集項目は内政問題、外交問題、社会問題、経済、宗教、思想、生活、風習、文化、主要人物と幅広い（41）
- ビラにはスターリンなどソ連要人の名前はあまり出ない。反ボリシェビキは出るが、共産主義批判も露骨でない。厭戦、反戦、和平が提起されるが、力点はあくまで捕虜優遇、投降勧誘（17－資料3）
- スターリン批判は散見されるが、個人攻撃は少ない。それでもスターリンの女性関係を示すビラを作成しようとしている（31）。これは南方に撒かれた「性欲挑発煽情」ビラを念頭に置いたものであろう。ただこの種のものも少ない。イラスト、写真もない。勝野らのグループへの漫画家、写真家などの参加はなかったのであろう。
- 英米とソ連との離間を策したコピーは目立つ。
- ロシア正教弾圧政策抗議のビラも多い。
- せつかくの研究成果が実践に移されることはなかったと思われる。

2、 検証難しい参本系プロダクション

① 九段研究所

開設は1938年か、1939年か

1938年頃設立説— 馬場秀夫、原善一郎（山田耕作マネージャー）、岡田桑三（松竹俳優山内光）、吉村柳里（ニコライ神学校出身の宣教師）、高谷覚三、勝野金政、ルシュコフ（多川37）（勝野、歴史と人物）

1939年8月ソビエト研究所：通称九段研究所の開設（岡田242、年表）

第8課第11班長 矢部忠太中佐就任

反スターリン宣伝の展示会、参本内で開く（多川60、岡田247）

1939年4、5月説— 岡田、参謀本部で馬場秀夫、高谷覚蔵、吉村柳里、勝野金政、矢部忠太に会う（岡田241）

この頃、贋札製造計画 陸軍省経理局山本憲蔵主計少佐が登戸研究所で、第8課兼任の形で遂行（245）

戦争末期 参謀本部は結局対ソ調査研究などを放棄、九段事務所閉鎖、東方社も解散。駿河台分室で対米宣伝工作一本化（勝野、歴史と人物）

② 東方社

1941年3月東方社設立（岡田242、257）東京市小石川区金富町47（文京区春日）（多川11、49、77）木造洋風3階、222坪

1944年5月九段坂下野々宮写真館ビルへ移転（多川164）42年終わり頃移転？（恒石90）（現住所、千代田区九段南4-7-23、池田32）

FRONTの発行（恒石163）

北方対ソ宣伝のための研究機関（恒石163）

嘱託約20名（恒石164）

三井、三菱、住友から各15万円の創立資金

矢部、岡田の資金集め、参本からの相対的独立

（岡田248）

③ 淡路事務所

40年8月神田淡路町 荒井ビル 責任者第8課多田少佐（中野138） 南進（米英蘭）向け宣伝ビラ（岡田243）

伝単の種類 約80種（各10～50万枚）

投降票 約10種（各30～50万枚）

ポスター 10種

マッチペーパー 120種（中野139頁）

1942年終わり、淡路事務所、野々宮ビルに移転、東方社と合体（ただし部屋は別べつ、恒石91）

勝野、「よく社へ顔を出していて、社員も皆、彼を理事だと思っていた。理事会もなく暇なときは、経理の国司を相手に碁・・・東方社の裏の仕事に関しては、他の理事よりも深く関与していたことは間違いない（多川77～8）

「こうした仕事は編集部ではなく調査室でやっていたようだ。社内では秘密のベールをかぶっていて、のぞき見ることもはばかれる雰囲気であった。ここでは対ソ戦に備えての、宣伝ビラ・投降勧告ビラ・反戦ビラなどをつくっていたらしい。岡田と勝野がこの部屋にいたことが多かったという。しかしこの後戦争が太平洋一帯に拡大して、陸軍の主力は南方軍に移り、ソ連軍もヨーロッパ戦線で釘づけになってから、対ソ戦用の宣伝物は必要がなくなった。岡田理事長がやめた一九四三（昭和十八）年ごろは勝野も出てこなくなって、こうした裏の部門は自然に消滅したと思われる」（多川78）。

43年8月21日 経済的危機、恒石からの批判→岡田理事長辞任、林達夫就任（岡田、253、年表）建川美次中将、社長就任（恒石164）、南方向けFront, 毎号1千部（恒石164）

太田英茂事務長就任

④ 駿河台技術研究所

43年11月3日（岡田243）（恒石196）宣伝放送

後に駿河台分室（恒石196）俘虜放送（中野140）

1945年7月1日 機構改正 陸軍省軍務局別班（大本営報道部）に移管（中野140）

九段事務所の移転吸収、対敵ラジオ放送

恒石、捕虜53名選定を池田に一任（恒石196）

職員の業務分担 企画部に池田、勝野（恒石200）

九段事務所ではソ連陸軍亡命のルシュコフ3等大将は「ロシア語のできる中田光男氏と憲兵の小池周一郎曹長が世話して、目黒区本郷町四九（現在の碑文谷五一二六一一）に住んでいて、彼自身がソ連の短波放送を聞いて分析をし、九段事務所の勝野君にロシア語で報告し、彼が翻訳して参謀本部に提出していた。吸収後、この勝野金政君は、駿河台分室の企画部に籍をおくことになり毎日来ていた（中略）私は、彼から毎日のようにソ連での共産党の宣伝謀略の策略や高等戦術について徹底的に教えてもらったから、たいへん親しくなり、その交友は今日までつづいている」（池田32）

44年春戦災 傳単部も移転 駿河台文化学院へ（恒石91）

⑤ 陸軍中野学校

防諜研究所新設 38年4月1日 九段下愛国婦人会本部附属建物

〃 中野移転

39年5月11日 防諜研究所廃止、後方勤務要員養成所設立

陸軍中野学校設立 40年8月1日（北島卓美校長）

41年10月 参謀本部直轄

ソ連の政治部的な軍人教育機関を提案、諜報技術は従とする考え

川俣少将の中野学校は主客転倒（勝野。歴史と人物）

3、多様な日本陸軍の放送宣伝・謀略

① 参謀本部

陸軍 実施報道部、

企画第8課 課長1（少将または大佐）、班長1（大、中佐）、課員2（中、少佐）、
部付将校2、3名、下士官または判任官数名、

淡路事務所（伝短作成、囑託5）、東方社（宣伝用出版物作成、囑託約15-20）

駿河台分室（対米放送、捕虜放送、勝野金政、池田徳真ら有給囑託30）、別班（米国内
放送傍受、少佐1、尉官2、2世囑託約200）（恒石156、200~201）

② 朝鮮軍 対ソラジオ業務報告 第1号(1938年~)、対ソラジオ業務月報 1940年 10月 粟屋、竹内編『対ソ情報資料』第3巻

対ソ放送の効果

イ 一般国民ニ対シテハ前述ノ如ク聴取ヲ制限セラレ…効果ナシ

ロ 軍隊及官辺ニ対シテハ効果大（413ページ）

③ 北支軍 華北放送協会 北京中央広播電台、済南、天津、開封、太原、運城、青島、 唐山、石門、徐州

④ 中支軍 中国放送協会 南京中央広播電台、上海、漢口、杭州、蘇州、寧波 （『ラジオ年鑑』昭和18年）

Chisolm 事件—上海の東京ローズ裁判

「中国人向けの宣伝—ラジオ」『「帝国」日本の学知』第4巻、

⑤ 南方軍

「光機関の多彩なインド向けラジオ放送」（山本138-154）

⑥ 満州電電

「特務機関の秋草少佐の特命で、極秘裡に電話局内と機関内との間に特種回路を作っ
てご期待に添ったことがあるが、それ以来、特務機関の人とは非常に懇意になった」（『赤い
夕陽』208頁）

「関東軍の通信能力の一翼を担って立つということが、会社設立の一要素になっていた」
（Ⅱ、270頁）

⑦ ブラック・ラジオ

○ バンドン攻略戦 増岡敏和『謀略放送と1人の男—元 NHK 職員の証言』日中出版、
1982年、 太郎良定夫中尉の全般指導 恒石（106）

○ 自由セイロン放送局

「光機関月報」1943年12月（山本145）

基本文献

「対ソ宣伝資料」 1綴 「中田」所持、ガリ刷、カーボン複写、手書き、約160枚、1941年～1943年

勝野金政「参謀本部のなかで」(インタビュー構成、伊藤隆)『歴史と人物』中央公論社、1974年5月号

勝野金政『凍土地帯―スターリン粛清下での強制収容所体験記』吾妻書房、1977

参考文献

恒石重嗣『大東亜戦争秘録・心理作戦の回想』東宣出版、1978

中野校友会編刊『陸軍中野学校』1978

池田徳眞『日の丸アワー・対米謀略放送物語』中公新書、1979

多川精一『戦争のグラフィズム 回想の「Front」』平凡社、1988

多川精一『広告はわが生涯の仕事に非ず―昭和宣伝広告の先駆者太田英茂』岩波書店、2003

川崎賢子、原田健一『岡田桑三 映像の世紀―グラフィズム・プロパガンダ・科学映画』平凡社、2002

山本武利『特務機関の謀略』吉川弘文館、1998

加藤哲郎『情報戦と現代史―日本国憲法へのもうひとつの道』花伝社、2007

加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人―洋行知識人の反帝ネットワーク』岩波書店、2008